

「海を渡った車いす一外の世界を知らない友達へ」

江戸川区立松江第五中学校 3年
瀬川 大地

「今、私は幸せだろうか。」

私は現在車いすで中学校生活を送っている。もし、車いすが無かったら学校へ行くことも映画や美術館、旅行へも行けない。こんな私は周囲の人から見れば不幸な人間に見えるかもしれないが、車いすに乗りさえすればどこへでも行ける。幸せだ。

中学入学後、私はサイズが合わなくなり使い道のなくなった自分の車いすを処分することに抵抗していた。自分の足の代わりに何年も頑張ってくれた車いすだ。身体の一部を失うような気がして決心がつかなかった。そんな時、古い子供用車いすを海外へ送る活動をしている NPO 団体があることを知った。中古の車いすを海外の困っている子供達の役に立たせることができるというのだ。しかも、古いものでも修理洗浄され新品同様になり海外へ送られる。私はすぐにその団体に車いすを提供したいと連絡し、訪ねることにした。自分の車いすがどういった形でどこへ届けられるのか見届けたい思いからであった。

当日は 35 度を越える猛暑の中、大学生や留学生のボランティアを含む 70 名近い人達が活動していた。そして、タイに向けて 43 台の車いすが次々と荷造りされていた。帰る前に会の代表の方が、世界には障がいがあるのに車いすなどの移動手段がなく、外の世界を知らずに家の中だけで生活している子供達がたくさんいると教えてくれた。私の車いすは現在四台目だ。日本では比較的簡単に手に入る車いすも途上国では法制度が整っておらず障がい児にまで補助が届かないため利用できる子供はとても少ないのだそうだ。私は十歳で初めて日本から送られた車いすに乗る子どもの気持ちを考えてみた。その子は学校に通えるようになるのだろうか。友達と笑ったり勉強したり未来を夢見たりできるようになるのだろうか。世界が広がったその子はきっと幸せになれるだろう。現にこの活動を通して知り合ったタイの十二歳の少女は車いすが届き、遠くで家族のために働く父親に会いに行ったと嬉しそうに話していた。しかし、彼女の一番の夢である学校へは通えていない。彼女の村から学校へは遠く、車いすで通うのは難しいからだ。確かに彼女の生活は激変したが車いすを手にしてもまだ夢は叶わない。途上国では障がい児が学校へ行く事は簡単ではないのだ。

JICA では、このような NPO 団体をサポートしたり、青年海外協力隊の方が海外へ行く時に車いすを持って渡航するなど幅広い支援を行っている。今回のことがきっかけで私も将来海外で障がい児を助ける仕事に就きたいと考えるようになった。海の向こうには障がいがある為に学校に通うなどの外出ができない子供達がいることを知ったからだ。車いすを送るだけで彼らの夢が叶うと一方的に思っていた私は恥ずかしい。本当の意味での支援とは相手をよく知り一緒に考えることなのではないだろうか。車いすはあくまで一歩であってその先の幸せまで考えることが大切だ。